

### 1. 取組主体

名称：JA尾道市環境農業研究会、田んぼネット  
 担当窓口：担当課（者） JA尾道市御調営農センター たんぼでがんぼ一係  
 住所：広島県尾道市御調町大田800  
 電話：0848-76-2242  
 E-mail：i.nobuyasu@nifty.com  
 団体等の種類：JA尾道市環境農業研究会はJAの生産部会、田んぼネットは環境農業研究会に所属する者と非農家の者  
 構成員数：8人  
 活動内容を紹介するHP、情報誌等の有無：(有)・無  
 HPアドレス：http://ganbo.cocolog-nifty.com/tanbo/  
 連携している団体等の有無：(有)・無  
 →（有の場合）連携している団体の属性（複数回答可、主な団体等のみ）  
 市町村、学校、農林漁業者、(JA) その他（ ）

### 2. 地域の特色

尾道市御調町は、山々に囲まれ、地域を貫流する川沿いに平地が形成された中山間地域である。気候は、昼夜の温度格差がやや大きく、山間部の特性を示している。  
 少子・高齢化が急速に進行しており、今後も高齢化が進行することが想定される。  
 農業は稲作中心で、高齢化の進行、耕作放棄地の増加等の課題を抱えており、これに対する取組として、4つの集落営農型法人がある。

### 3. 取組開始時期・経緯

平成元年、御調町「減農薬研究会」で自然生態系を維持するため、減農薬の米作りを始めた。消費者へ米を直接販売するためには、減農薬米について知ってもらう必要があると考え、米作りに参加してもらうことになった。

### 4. 目的（目標）

消費者に、農作業の体験と農業の多面的機能を体感してもらい、農業・農村の素晴らしさを感じてもらう。また、田んぼに生息する生き物の説明を受けながら、生き物に実際に触れ、生態系を学ぶ。

### 5. 対象作物・参加者・経費

〈対象作物〉  
 (米) (野菜) 果実、畜産物、魚介類、きのこ、その他  
 →具体的な作物名・種類（サツマイモ）

### 〈参加者数〉

広島市、福山市、東広島市、尾道市（町内は少ない）在住の親子

17年度 30人、18年度 20人

取組名称は「たんぼでがんばー」（「がんばー」とは、広島県の方言で「わんぱく」という意味）

### 〈経費〉

道具等は手持ちの物を利用し、取組主体側の持ち出しはない。

田植えと稲刈毎に参加費（昼食代を含む）：大人2,000円、中高生1,500円、小学生1,000円。（講師旅費等に充てられる）

## 6. 具体的な取組内容

米作り、サツマイモの栽培、田んぼの生き物観察等に取り組んでいる。

田植え時には、牛の代掻き実演とサツマイモの苗の植え付け、稲刈り時には、サツマイモ掘りを実施し、毎月一回程度、田んぼの生態系を破壊しないよう配慮した田んぼの管理を行っている。

また、毎回「わくわく自然講座」を実施し、田んぼに生息する生き物の観察や生き物に関して学習し、農業の役割や自然環境について考えている。講師には、生物と農業の関わりについて研究している愛媛大農学部の日鷹一雅助教授のグループに協力を頂いている。

地域の農家の方々とは、わら細作りを指導してもらう等の交流がある。

取組の様子は、ホームページ「たんぼでがんばー」や、情報誌「おなかま通信」によって積極的に発信されている。

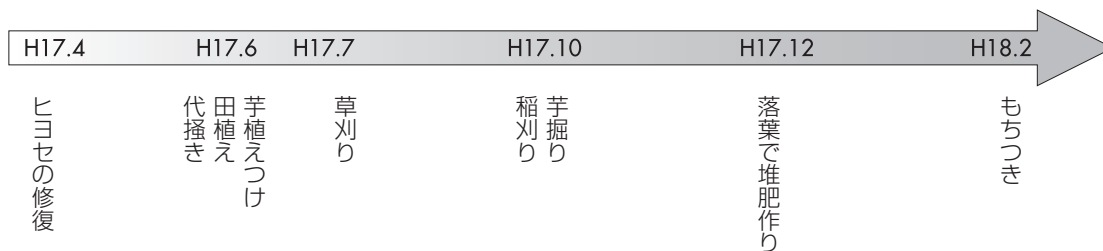


連携しているJA尾道市には、環境農業研究会の受付事務局を担当してもらっているほか、活動の準備にも協力してもらっている。

参加者の募集方法は、新聞、JA尾道市の広報誌、HP掲載による公募である。

### 〈17年度〉

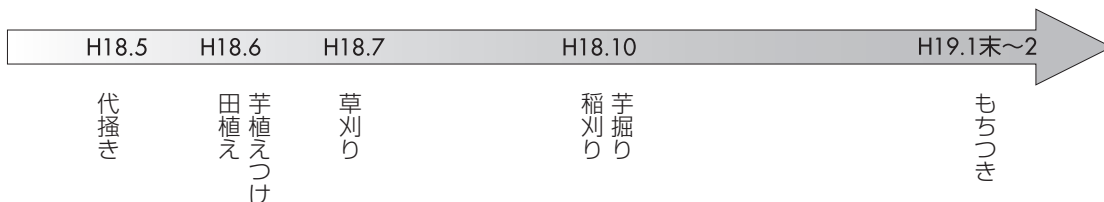
米作り、サツマイモの栽培、わくわく自然講座



わくわく自然講座：ドジョウ、ゲンゴロウ、オタマジャクシ、カエル等の観察、生き物についての講義

〈18年度〉

米作り、サツマイモの栽培、わくわく自然講座



わくわく自然講座：カブトエビ、ホウネンエビ、ドジョウ、ゲンゴロウ、オタマジャクシ、カエル等の観察、生き物についての講義

7. これまでの成果

参加する子どもから大人まで農業だけでなく、田んぼや里山に住む生き物や植物に関心を持ってもらっている。

取組主体側も、農業と田んぼに住んでいる生き物について、子どもたちと一緒に学ぶことによって、改めて農業の果たしている役割の重要さに気づくことが多い。そのことによって、自分たちの仕事に誇りを持ち、気持ちを新たにしているところもある。

地域農家も、生き物との共生に関心を持つようになった。このことから、生き物が生息するための環境作りをするために、減農薬米「源五郎米」を作り始めることに繋がったといえる。

また、地域農家の老人によるわら細工体験では、子どもたちは昔の事を知ることができ、一方、教える老人は持っている知識を人に教えることで新鮮な気持ちを持つことができている。

8. 今後の構想、課題

町内の子どもたちにも参加してもらい、農業が果たす役割を学んで、農業を理解して欲しい。また、大人になった時に、農業の素晴らしさを伝えられる人に育てて欲しい。そのためには、地元の子どもたちにどうやって参加してもらうかが課題。学校と連携しての取り組みも一つの方法として考えられる。

取組主体側も楽しみながらやるのが大切と考えているので、今後は、取組を効果的に進めていくために、効果を把握する方法を検討したい。また、取組内容を科学的に記録に残していくことも考えたい。

## 1. 取組主体

名称：立神峡公園管理組合（たてがみきょうこうえんかんりくみあい）  
 担当窓口：担当課（者）館長（環境教育担当）幸山昌生（こうやままさお）  
 住所：熊本県八代郡氷川町立神648-4  
 電話・FAX：0965-62-1543  
 E-mail：tategami@town.kumamoto-hikawa.lg.jp  
 団体等の種類：その他（任意団体）  
 構成員数：9名  
 活動内容を紹介するHP、情報誌等の有無：有・無  
 HPアドレス：<http://fureaitei.com/~tategami/>  
 連携している団体等の有無：有・無  
 →（有の場合）連携している団体の属性（複数回答可、主な団体等のみ）  
 市町村、学校、農林漁業者、JA、その他（里山保全団体、学童保育所、教育委員会）

## 2. 地域の特徴

立神地区のある旧宮原町一帯は薩摩街道（現在は国道3号線）が通り、古くから宿場町として栄え、氷川流域の物資や人が集まる地域であった。平成17年に隣りの竜北町と合併するまで、110数年の歴史のある町でもあり、昭和の大合併もせずに県下で一番面積の小さい町であった（約10km<sup>2</sup>）。

国道3号線から車で5分ほどの距離で、自然環境は山有り川有りの豊かな地域であるが、戦後の生活様式の変化により薪や炭を使わなくなると、里山は荒廃し、耕作放棄の農地、果樹地も増加するとともに川での漁も減少。しかし、夏は今でも川遊び客でにぎわっている。隣接する八代市種山地区はしょうが栽培が盛んである。

## 3. 取組開始時期・経緯

平成9年より五木五家荘県立自然公園の立神峡公園において、里山を活用した環境教育活動を開始。昭和30年代初期の農家屋敷をイメージした「里地屋敷」や棚田、果樹地、炭焼き小屋等の里地・里山を拠点に「人と自然との関わり」を学ぶ場として整備。様々な環境教育活動の中で田んぼの学校は平成12年より里地屋敷下の棚田を使って開始。

## 4. 目的（目標）

昔ながらのお米づくりでは、古い農具を使い、年間を通じたプログラムとして実施。単なる田んぼ体験ではなく、田んぼに棲む生きもの調査や食物生産の苦労や知恵を感じ取る内容をめざしている。

## 5. 対象作物・参加者・経費

## 〈対象作物〉

①米、野菜、果実、畜産物、魚介類、きのこ、その他

→具体的な作物名・種類（うるち米、もち米）

## 〈参加者〉

- |                |                     |
|----------------|---------------------|
| 1、東陽村立種山小学校5年生 | 全員（24名）（平成13年度）計7回  |
| 同上             | 全員（31名）（平成14年度）計8回  |
| 同上             | 全員（17名）（平成15年度）計8回  |
| 同上             | 全員（22名）（平成16年度）計8回  |
| 同上             | 全員（18名）（平成17年度）計10回 |
| 八代市立種山小学校5年生   | 全員（22名）（平成18年度）計8回  |
- 2、宮原町立宮原小学校高学年クラブ活動「里山とともだち」
- |       |     |    |       |     |    |
|-------|-----|----|-------|-----|----|
| H15年度 | 42名 | 5回 | H16年度 | 10名 | 2回 |
|-------|-----|----|-------|-----|----|
- 3、宮原学童保育（地域子ども教室）「田んぼの学校」
- |       |      |     |       |      |         |
|-------|------|-----|-------|------|---------|
| H17年度 | 337名 | 15回 | H18年度 | 300名 | 14回（予定） |
|-------|------|-----|-------|------|---------|
- 4、一般募集：里山クラブどんごろす会員、一般参加の近隣町村の親子、
- |       |     |         |       |     |    |
|-------|-----|---------|-------|-----|----|
| H12年度 | 41名 | 3回      | H13年度 | 94名 | 9回 |
| H14年度 | 63名 | 8回      | H15年度 | 56名 | 7回 |
| H16年度 | 41名 | 2回      | H17年度 | 24名 | 2回 |
| H18年度 | 50名 | 10回（予定） |       |     |    |

## 〈経費〉

## 17年度例

【支出】指導者謝金15万円 27回指導日 1回1000～6000円 のべ指導者90人  
 日常手入れ作業（約90日）、道具使用、雑費ほか 20万円

【収入】参加者負担金 種山小：17年度まで5万円/年 東陽村教育委員会より助成  
 18年度より個人負担へ（5万円）

氷川町の環境教育補助金より 約10万円/年

文部科学省の地域子ども教室活動助成金より 約20万円

## 6. 具体的な取組内容

## 概要（関係者の連携方法・地域との関わり等含む）

種山小学校の総合学習の時間で「田んぼの学校」が始まって6年目。毎年変わる担任の先生との事前の打合せは欠かせない。町村は違うが学校・PTAも協力的で、保護者の方から古い農具を譲っていただいたりしている。

宮原地域子ども教室の田んぼの学校では、親子で参加する日を作ったり、子ども教室実行委員、学童保育の指導者、教育委員会との打合せも頻繁に行いながら実施している。

単なる体験で終わるのではなく、昔ながらの田んぼの作業を年間通じて計画的に行うことで、生きものの季節変化を感じることや、食べものの生産の苦労や知恵を感じてもらえるような取組みをめざしている。

### 〈17年度〉

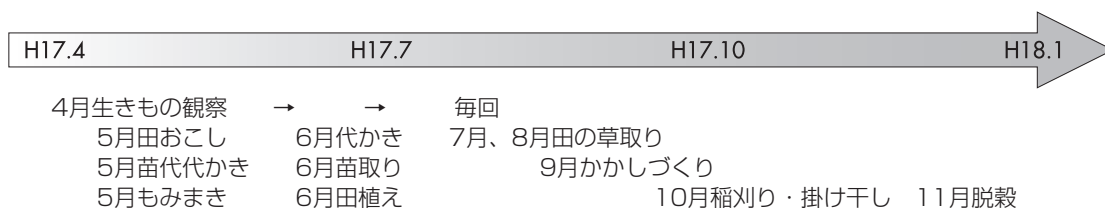
(内容) ～古い農具を使った昔ながらのコメ作りと生きものの観察～

4月：れんげ畑の田んぼを観察

5月：苗代の田おこし 苗代づくり もみまき

6月：代かき（どろんこ体験） 苗取り 田植え 7月8月：田の草取り

9月：かかしづくり 10月：稲刈り 11月：脱穀



### 〈18年度〉

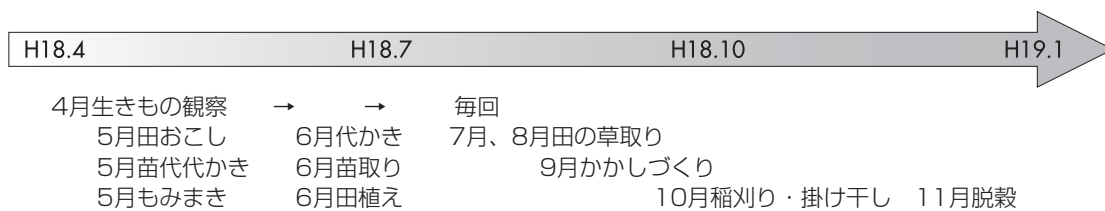
(内容) ～古い農具を使った昔ながらのコメ作りと生きものの観察～

4月：れんげ畑の田んぼを観察

5月：苗代の田おこし 苗代づくり もみまき

6月：代かき（どろんこ体験） 苗取り 田植え 7月8月：田の草取り

9月：かかしづくり 10月：稲刈り 11月：脱穀



## 7. これまでの成果

毎日の食事そのものの変化についてはわからないが、田んぼに対する愛着が増えたのではないかと感じている。特に17年度の種山小学校は、子どもたちの作詞、担任の先生の作曲、隣町の音楽愛好家の方々の録音及びミキシングの協力を得て、「田んぼの学校」の歌がCD/DVDにレコーディング出来た。

地元の音楽会、イベント等で子ども達が歌う機会や、地元のケーブルテレビが田んぼの学校の様子を毎回取材され、連日、放送されたこともあり、田んぼでの活動が広く知られることとなった。



## 8. 今後の構想、課題

活動財源が不安定であるが、田んぼの学校のねらいを果たすためには人の力が重要なので、持続可能な指導・支援体制を築くことを常に考えている。期待されている教育効果を明確に具現できればいいのだが、どのように伝えていくか、今後いっそう検討していく必要がある。

## 【今後へ向けて】

里地公園の3枚の小さな棚田は、純粹に学習用に使用できるため活動内容は自由がきく反面、収穫量は少なく経済価値はほとんど無い。経費的には、町独自の環境教育事業の予算と各種助成金、そして取組みに対する良き理解者・支援者の協力があるから実施できていると言っても過言ではない。

少なくともこの取組みを広く知ってもらうことで、学校教育と密接に連携・協働できる「地域の教育力」という位置付けで社会に浸透させることはできる。学校教育・保育・社会教育・生涯教育という枠組みにとらわれずに、生きることは食べること、食べものを育てることは学ぶこと、そんな学びの場が必要と考えている。

そして、その教育の力を上げていくためには、子どもたちにとって（大人にとっても）、身近な範囲に食の現場、生きものの現場、生死の現場がある環境を伝え続けていくことが大切であり、人の暮らしにはいつも農＝食＝命があることが重要であり、生きていくためには、他の命をいただき、我が命を伝えている現実を実感できる場が必要と考えている。

今後も、この取組みを継続的に続けていくことができるよう、志と質の高い環境教育プログラムをめざし、指導者側は学び続けていく必要がある。すべての子どもとすべての大人に対する「学びの場」をめざして。

## 田んぼの学校 熊本県・宮原町地域子ども教室の取組み紹介

【田んぼの学校 立神峡里地公園】

●八代郡氷川町、立神（たてがみ）地区にある立神峡里地公園での子ども地域教室の内容は、棚田を活用した昔ながらの米作り体験や里地・里山の生きもの調べなどが中心の「田んぼの学校」を行いました。地域の農家や自然観察指導員、学童保育の指導員、ボランティア、公園管理組合の協力のもと、年間16回の活動です。親子参加の活動もそのうち年4回行い、身近な自然である里山の魅力を参加者全員で、楽しみながら活動しました。

5月 代かき（どろんこ）体験 どろんこの感想はいろいろでした、。



6月 田植え 親子でがんばりました。里地屋敷でも遊びました。



7月 田の草取り 暑かったけど、作業後の川遊び楽しかったね。





8月 田の草取りと川遊び 川はやっぱりおもしろい！スイカもみんなで食べました。



9月 かかしづくり 台風や病気に負けずにおいしいお米になるように願いました。



10月 稲刈り 収穫はほんの少しかつたけど、親子で協力して掛け干しました。



## 1. 取組主体

名称：鹿児島の食農育と地域連携を考える会

担当窓口：担当課（者）大久保孝志

住所：鹿児島市岡之原町1138-2

電話・FAX：099-244-1032

E-mail：ohk@lime.ocn.ne.jp

団体等の種類：その他（農家、教職員、住民）

構成員数：16人

連携している団体等の有無：有・無

→（有の場合）連携している団体の属性（複数回答可、主な団体等のみ）

市町村、学校、農林漁業者、JA、その他（かごしまの食を語る会、食農育フォーラム）

## 2. 地域の特徴

都市近郊で住宅地（団地）と昔からの田畑が混在する地域。新住民と古くからの住民が混在している。

## 3. 取組開始時期・経緯

平成16年6月、21世紀を担う子どもたちのために食農教育の専門家である前文科省主任視学官嶋野道弘氏を講師に招き、「学校と地域の連携」について学ぼうと集まったのがきっかけで活動が始まった。

## 4. 目的（目標）

- 1 子どもたちのために、学校と地域の連携で「総合的な学習の時間」の充実を進める。
- 2 地域の山河、畑、田んぼなど自然の関わりを通じて食や農、教育環境について理解を深める。

## 5. 対象作物・参加者・経費

〈対象作物〉

米、野菜、果実、畜産物、魚介類、きのこ、その他

→具体的な作物名・種類（米、大根、そば、大豆、きのこ、野草）

〈経費〉

川上小学校5年生 全員 17年度 95名 18年度 88名

ふじヶ丘保育園 17年度 50名 18年度 51名

緑ヶ丘、川上、大久保、花野在住親子 17年度250名 18年度150名（予定）

## 〈経費〉

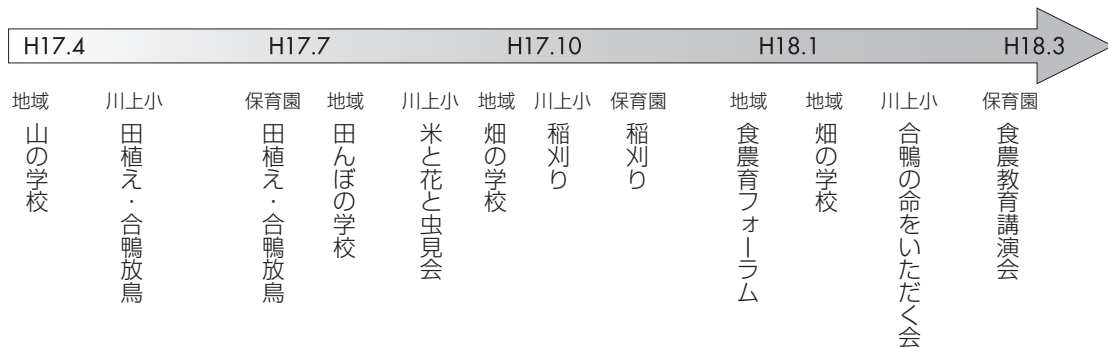
年間50万円程度。各行事内容に応じて、500～1000円程度を会員及び参加者に負担してもらっている。現在は行政からの支援は受けていない。

## 6. 具体的な取組内容

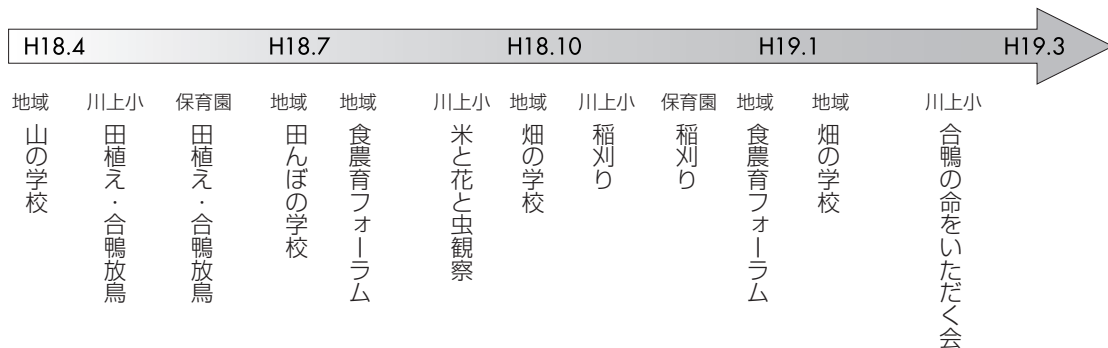
## 概要（関係者の連携方法・地域との関わり等含む）

- ・地域内の保育園、小学校、中学校で実施する稲やその他の作物づくりに会員の農家が指導に行く（計画段階から当事者との話し合いをもつ。）。
- ・食農教育及び環境学習に興味を持ってもらうため、会で「田んぼの学校」などの行事や講演会等を実施する。地域住民等への広報について学校などの協力をもらう（チラシ配布など）。
- ・会の行事としての講演会などの講師を「かごしまの食を語る会」他の連携団体の方をお願いしている。

## 〈17年度〉



## 〈18年度〉



## 7. これまでの成果

### 1 保育園

米や野菜づくりを通じて、食についての関心が広がり、食欲が向上し、食べ残しが減ってきている。

### 2 小学校（5年生）

合鴨農法による米づくりを通じて、親子での対話が深まり、食べ残しが少なくなり、「いのち」について深く考え向き合うことで、友人に対して、また自分に対してやさしくなってきたようである。

### 3 地域の親子

日頃、何気なくながめている田んぼ、山（野草）、畑（野菜）での活動を通じ、生き物の豊かさや自然の仕組み等について関心が深まり、環境を守ることの大切さの理解が深まってきた。

## 8. 今後の構想、課題

現在、会員の出来る範囲で、食・農・環境について、地域の子供達及び住民に対してその大切さを伝えようとしている。会員以外にも多くの人たちが色々な方向から同様の活動をしているものと思う。そのような人たちと連携して、食・農・環境の大切さを世に広めていきたいと思う。

また、この会自体の組織の力をつけていきたい。

## 第2章

### その他の事例

その他の事例として紹介させていただくのは、次の4つの分野の事例です。

- ・ 学校
- ・ 市町村
- ・ 生産者、JA
- ・ その他の取組主体（NPO法人、福祉団体など）



モデル事例、タイプ別事例でご紹介した事例以外にも各地で多くの教育ファームの取組が行われています。どの教育ファームも、多くの人に農業体験を通して自然の恩恵を学んで欲しい、食に関わる人々の活動への理解を深めて欲しい、といった目的を持ち、人手や予算面など制限の多い中、工夫を凝らした取組をされています。

今後更に関係者との連携の下、取組内容を充実させ、地域での教育ファームの広がり大いなる力を発揮していただける事例として紹介させていただきます。

その他の事例

## (1) 学校による取組





### 1. 取組主体

名称：栃木県芳賀町立芳賀北小学校  
 担当窓口：担当課（者） 菅又 容子教諭  
 住所：栃木県芳賀郡芳賀町芳志戸1030  
 電話：028-677-0272・FAX：028-677-0755  
 団体等の種類：学校  
 連携している団体等の有無：有・無  
 →（有の場合）連携している団体の属性（複数回答可、主な団体等のみ）  
 市町村、学校、農林漁業者、JA、その他（ ）

### 2. 地域の特徴

芳賀町は、宇都宮市の東に位置し、町内の約60%が農地で、米麦や梨の産地として有名。芳賀工業団地には、優良な企業が誘致され、町の昼間人口率、財政力指数とも、県内で1位となっている。

### 3. 取組開始時期・経緯

平成15年4月。芳賀北小学校は15年4月より統廃合によりスタートする。学校が、総合学習の取組の中で地域との連携を深めたいという考えから、地域の農業者に講師を依頼する。

### 4. 目的（目標）

教育ファームのねらいは、農作物の生産や収穫などの体験を通して、土へ親しみ、働く意味と収穫の喜びを味わい、環境を大切にする心や食材への感謝を育むことを目的としている。

### 5. 対象作物・参加者・経費

#### 〈対象作物〉

米、野菜、果実、畜産物、魚介類、きのこ、その他

→具体的な作物名・種類（じゃがいも）

#### 〈参加者〉

芳賀北小学校 3年生44名（じゃがいも）・5年生44名（米）（18年度）

#### 〈経費〉

じゃがいも：無料（講師提供）

米：60,000円（芳賀町稲作体験事業：講師謝金 機械借上経費等）

## 6. 具体的な取組内容

### 概要（関係者の連携方法・地域との関わり等含む）

この取組の背景に、芳賀町では、生ごみから製造した堆肥を利用した循環型農業を推進している事が挙げられる。町内の学校や企業等から出る生ごみを回収し堆肥を製造、その堆肥を地元の農家に還元し、この堆肥を使って生産した野菜が学校給食の食材として提供されている。参考になるが、町内小中学校給食の地場産農産物の利用率は、平成17年度の年間合計で43.9%と他の市町村と比べ高い水準となっている。

この循環型農業を確立している生産者グループや農業インストラクターの方々が、教育ファーム指導者として学校に携わっている。

芳賀北小学校では、芳賀町と教育ファーム指導者からの支援を受け、全学年が農作業を体験するための「学校農園利用計画」を作成し、活動に取り組んでいる。特に、18年度の3学年（じゃがいも）と5学年（水稲うるち）は、教育ファーム指導者からの全面的支援により取り組まれている。

また、学校では、教育ファームなどで収穫された農産物を使用した年3回の「ふるさと給食の日」や11月の収穫祭（発表の集い）等の行事に、教育ファームの指導者や学校給食の食材を提供している農家及び地域住民の方々と交流を深め、年間を通じて地域の方々とのおふれあいを図っている。

### 〈17年度〉

#### 米作り

苗づくりの時から減農薬で栽培することにより、自然環境に関心を持つようにさせている。また、自分たちで植えた稲の収穫をさせることにより、食材への感謝が育まれている。



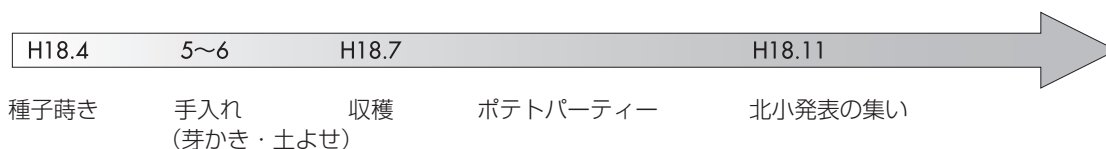
### 〈18年度〉

#### 米作り

17年度と同様

#### じゃがいも

じゃがいも作りに使用する有機肥料が、自分たちの給食の残飯からどのように変化するかを学習し、更に、生産した農作物やそれに関わっている生産者とふれあうことで、郷土のよさを学び、郷土を大切にしようとする心を育てている。



### 7. これまでの成果

- 実際に作物を育て体験の幅が広がり、自ら料理をすることにより食に対する関心が高まる。
- 農業のプロに安心して任せられるので、安心して農作業体験をさせられ、また、狙いが確実に達成できる。
- 地域の良さを再認識できるし、お世話になった方の温かな人柄にふれ、感謝の気持ちを持つことが出来た。
- 収穫祭などでの食を通したイベントが世代間交流につながっている。
- 栽培体験から大地や太陽、雨など自然の恵みも感じる事ができ、自然に感謝する気持ちが育まれる。
- 低農薬栽培や有機肥料の使用を通じて、食べ物の安全性の意識向上が見られる。

### 8. 今後の構想、課題

- インストラクターの方々との関わりをもっと深くしていきたい。
- 現在、米及びじゃがいもをお願いしているが、その他の作物もお願いしたい。
- 子どもだけの活動に終わらせることなく、保護者・地域にも広げていきたい。
- 食材に関心を持たせ、安心して食べられるおいしい食物を選ぶ気持ちを高めていきたい。

### 9. その他

学校給食の牛乳パックを解体し分別しており、リサイクル意識、ゴミ減量化必要性を身近な問題として捉えており、環境問題への意識が高まっている。

## 1. 取組主体

名称：六合村立入山小学校

住所：六合村大字入山573-3

電話：0279-95-5004・FAX：0279-95-5099

団体等の種類：学校

連携している団体等の有無：(有)・無

→ (有の場合) 連携している団体の属性 (複数回答可、主な団体等のみ)

(市町村)、学校、(農林漁業者)、JA、(その他) (県関係機関)

## 2. 地域の特徴

六合村は、群馬県の最北西部、長野・新潟県境に接する位置にあり人口約2千人、総面積の大半を山林原野が占める標高600～2300mの地域である。主な農産物は鳥獣害被害の多い中で、山野草を中心とした花木、ベニバナインゲンなどがある。

## 3. 取組開始時期・経緯

平成17年度から群馬県「食農教育モデル校」支援事業を実施するにあたり取り組みを開始。

## 4. 目的 (目標)

農業体験学習を通して、生活に欠くことのできない食料を生産する農業の役割や食料の大切さを理解させるとともに食料自給の重要性の認識を高める。

## 5. 対象作物・参加者・経費

〈対象作物〉

米、野菜、(果実)、畜産物、魚介類、きのこ、その他

→ 具体的な作物名・種類 (六合村特産のベニバナインゲン、入山キュウリを中心に数種)

〈参加者数〉

六合村立入山小学校生徒 全員 (64名) (平成17年度)

(58名) (平成18年度)

〈経費〉

群馬県「食農教育モデル校」支援事業を活用 予算額12万円 (他特になし)

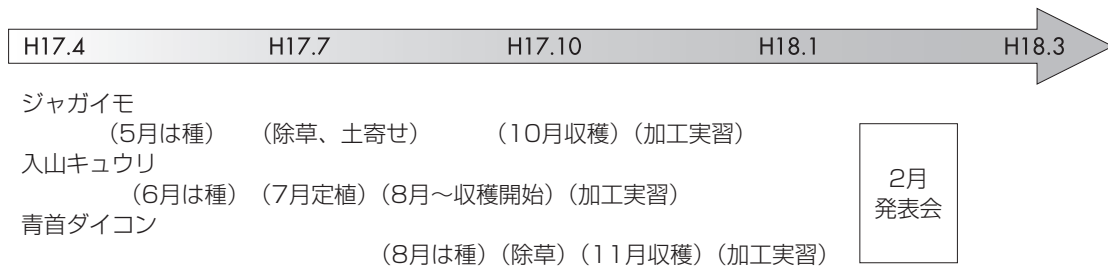
## 6. 具体的な取組内容

## 概要（関係者の連携方法・地域との関わり等含む）

学校を中心として、県、市町村、農業者（指導者）との調整会議を定期的に行いながら取り組みを進めている。指導は、地域の農業者に依頼し、は種・定植等技術的指導を行っている。

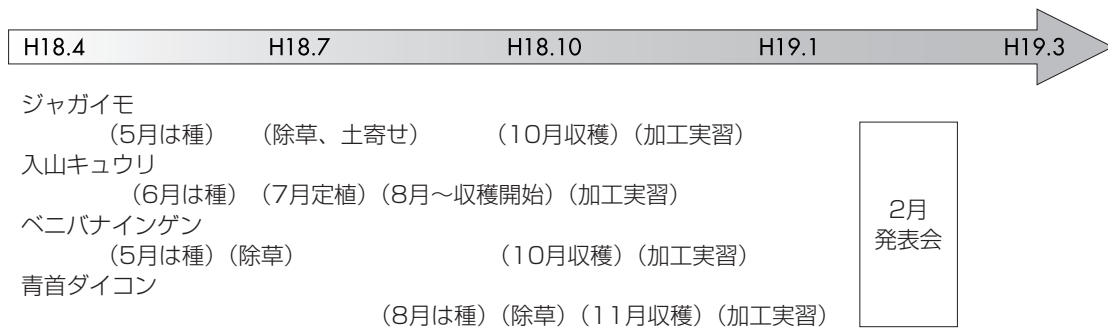
## 〈17年度〉

ジャガイモ（1・2・6年生）、入山キュウリ（4年生）、青首ダイコン（3・5年生）を用いて体験学習を実施。



## 〈18年度〉

ジャガイモ（1・2・6年生）、入山キュウリ（4年生）、ベニバナインゲン（5年生）、ダイコン、カブ（3年生）を用いて体験学習を実施。



## 7. これまでの成果

- ・学校のプログラムの中に取り入れてもらったことにより、単に栽培体験だけでなく、加工実習や体験学習の発表会も開催でき、生徒により農業、植物について理解を深めてもらうことができた。
- ・播種、管理、収穫、加工、試食といった一貫した体験を通し、農業や食に対する理解が深まった。
- ・児童が作物を育てる喜び、労働の喜びを味わうことができた。
- ・地域の特色ある作物の栽培を取り入れたことにより、地域の伝統や特色に興味を持ち、

地域への愛着が深まった。

- ・年間にわたり地域の人達の指導を受けたことにより、地域と学校との結びつきが強まり、地域で子どもを育てるという意識がより強まった。

#### 8. 今後の構想、課題

- ・県の事業から外れても（予算的な支援が無くなっても）、この取り組みを今後継続させて行くことが課題。
- ・学校で継続していくためには、地域の人達のボランティア的な協力と苗代などの消耗品費及び継続的な圃場の確保が必要であるため、村や地域、PTAと連携して、検討をしていく。
- ・モデル校として支援している3年間の間にボランティア等の協力体制が整えられるかがポイントとなる。